

ハヴェルの自伝的戯曲「抗議 Protest」に関する 考察 —— 人称の変化が示す関係性 ——

野田 伊津子

1. はじめに

本稿は、不条理演劇の反体制作家であり、ビロード革命（1989年）後に第十代チェコスロヴァキア共和国大統領（1989年12月29日～1992年7月20日）および初代チェコ共和国大統領（1993年1月26日～2003年2月2日）を務めたヴァーツラフ・ハヴェル Václav Havel の戯曲と思想を通して、普遍的な人文主義、すなわち教会の権威や神中心の世界観から人間を解放し、ギリシャ・ローマの言語・文学・芸術の研究を通じて普遍的な教養を身につけ、人間の尊厳を確立することを目指す運動へ向かおうとする方向性と、自民族あるいは自国を愛するという方向性が、彼の内でせめぎあい対立していることを読みとり考察するものである。

ハヴェルの戯曲はプラハの春（1968-1969年）以降に本国で発禁処分になったこともあり、主に旧東側以外の英語圏や独語圏で上演され、研究が行われてきた。ハヴェルに関しては政治学の視点からの論文は数多く存在する一方、戯曲を論じたものは少ない。現在、本国においては英語圏や独語圏に比較すれば少数ではあるが、論文が発表されている。日本においては近年（2006年）言語学的視座から研究論文が一点見られるだけである。本稿では、ハヴェルの自伝的戯曲とされる三部作（「観客 Audience」「内覧会 Vernisáž」「抗議 Protest」）のなかで最も言論統制の厳しい時期である憲章 77 の直後に執筆され、チェコスロヴァキア国内での検閲および出版上演禁止により、やむなくウィーンで独語により初演されることになった「Protest」¹について検証する。戯曲を含めたハヴェルの文章の底本としては、大統領就任以降に編纂された『ハヴェル選集 2 Spisy2』を現時点で最も信用に足るものとし

て採用した。本論では作品の検証を重ねることを通して、作家の意図したことを分析する。また他言語に翻訳された場合も、翻訳者の解釈を通して、さらに異なって受容される可能性がある。その点も含めて明らかにしていくことを通して、主題の理解の重層化につなげたい。邦訳による出版が未だなされていない「Protest」は、題名を直訳するならば、おそらく「抗議」となるだろう。「Protest」は二人芝居で、あるミュージシャンの不当逮捕に対する警察への抗議文を中心に話が展開する。体制に順応して暮らしているはずのテレビ・ディレクターのスタニェックが、珍しく昔の友人である反体制作家ヴァニェックを自宅に呼ぶ。呼んだ意図が最初は隠されたまま、この一幕物の劇はスタニェックの書斎で進行する。様々な不利益を受けながらも自分の信じる価値を貫こうとするヴァニェック。ヴァニェックはハヴェル自身の分身として描かれる。生き方の違う二人が、お互いに相手の意図に抵抗するという内容も含まれているのである。本稿においてはハヴェルの作品に関して、基本的には筆者がチェコ語から直訳した題名をチェコ語に併記した。

2. 「抗議 Protest」背景—憲章 77

1975年、当時はありふれた弾圧事件が起こる。チェコスロヴァキアのアングラのロック・バンドがイベントで行った演奏が、公的なイデオロギーに反するとして国家保安警察の嫌疑を受けて活動を禁止され、メンバーが拘束された。ロック・バンドと近しかった反体制派が抗議に立ち上がり、劇作家ハヴェルが中心となって、有罪とされたミュージシャンたちを支援するための活動を行い、幾つかの声明を作成した。この声明への署名運動が行われ、後にノーベル賞を受賞するチェコの詩人サイフェルトをはじめとする著名人たち、体制に非協力的だったために社会的な圧力を受けていた学者ヤン・パトチカと息子も署名した。後に「Protest」と同時に初演された「Attest」の作者パヴェル・コホウトも署名している。76年にもっと原理的な声明を作成しようという提案がなされ、何回かの集まりを経てテキストが書かれ、77年1月に「憲章 77 Charta 77」の名前で発表された。これに続いて憲章 77 グループが次々と発表した文章は、人権擁護の義務を課したヘルシン

キ宣言を拠り所として、チェコスロヴァキア国内の人権侵害を批判し、国内法・国際法とソ連による「正常化」の現状との間の矛盾を指摘した。この憲章 77 のスポークスマンとなったのがプラハの春の当時外相だったイジー・ハーイェク教授とパトチカとハヴェルの三人である。一握りの知識人が国際協定や法を根拠に人権擁護を訴えた憲章 77 は、当局の過激な反応を引き起こした。体制側による反「憲章 77」キャンペーンの中で、スポークスマンの一人であるパトチカは「反共産主義への奉仕を始めた反動教授」とのレッテルを貼られる。活動が西側からも注目される中で当局の反応は激烈なものとなり、パトチカは官憲の連日による尋問により死にいたった。²このように政府による抑圧が強まる中で、その中で仲間同士が反目しあう痛みを経験し、結果として仲間から犠牲者を出した憲章 77 を背景として「Protest」は生まれた。

3. 人称の変化が示す関係性—執筆の時系列順に

「Protest」においてハヴェルは、スタニェックとヴァニェックおよび仲間との関係を親称や敬称を用いて示している。政治状況の変化により複雑になった人間関係を、久しぶりに会った二人が、どのように言葉で伝えているかを、原文のチェコ語、そして独語、英語の翻訳で見よう。

3.1. 原文チェコ語における tykat と vykat

最初にハヴェルは母語であるチェコ語によって「Protest」を執筆した。チェコ語では、相手との関係の親疎を tykat か vykat のどちらで話しているかで表す。親しさを示す tykat [不完了体 nedokonavý] は相手に人称代名詞 ty を用いて話すことである。意味は日本語に訳せば「君・お前」となる。対応して動詞も二人称単数形が用いられる。活用は「主(1)格 ty」「生(2)格 tebe, tě」「与(3)格 tobě, ti」「対(4)格 tebe, tě」「呼(5)格 ty」「前置(6)格 tobě」「造(7)格 tebou」である。ty は二人称の人称代名詞の主格で、同僚や同輩または目下の人間に対するとき用いる。そして、余り親しくないことを示す vykat [不完了体 nedokonavý] は相手に人称代名詞 vy を用いて話すことである。vy も同じく二人称の人称代名詞の主格で、親しい関係にない相手や目上の人間に対して

丁寧に「あなた」と呼ぶときに用いる。そして動詞は二人称複数形が用いられる。活用は「主(1)格 vy」「生(2)格 vás」「与(3)格 vám」「対(4)格 vás」「呼(5)格 vy」「前置(6)格 vás」「造(7)格 vámi」である。vy は二人称単数の丁寧な言い方として用いられるだけでなく、二人称複数の用法もある。

ヴァニェックはスタニェックに対して呼びかけ方も含めて、すべて vykat を用い、数回ある呼びかけの場面でも「～さん Pane (男性敬称 Pan の呼格)」をつけた上に姓で呼ぶ (Havel, *Spisy*2 661, 664)。昔はどうかであっても、現在は遠い存在であることが示される。スタニェックはヴァニェックを呼ぶときに姓のヴァニェックではなく、名のフェルディナンド Ferdinand の呼格 Ferdinande か、人間 člověk の呼格 člověče で呼んでいる。同等の親しい相手のような感じを与えつつ、しかし終始、vykat で話している。ヴァニェックの態度に比べると非常にアンパランスな印象を与える。十数年前には仲間ではあっても、スタニェックの方は互いの距離を縮めるつもりはない。対抗意識や優越感または頼み事があるなどの理由から親しさを装うのである。それはスタニェックとヴァニェックの共通の知人として名前が出るパヴェル・ランドフスキーとパヴェル・コホウトに対するスタニェックの呼び方を見ればよい。酒が好きで、よく酔っ払うランドフスキーに対しては、一流の役者とは言いが、役者と作家で職域が違うためもあるだろうが「ランドフスキー」と姓で呼ぶことで言葉に距離を表現させる。一方、同じ作家業でありながら西側でも認知されているという対抗意識を呼び覚ますパヴェル・コホウトに対しては「パヴェル」と名前で呼ぶ。そこには自分と彼が元は同じところにいた、同等のはずだという意識が透けて見える。それでいて、基本的な権利のために行動したことが西側でも認められている「パヴェル (・コホウト)」に対しては、平穏な生活のために保身をはかる自分は敵わない所があることを認めざるを得ない (Havel, *Spisy*2 654)。話の本題に入る前にスタニェックとヴァニェックはお互いの近況を尋ね合うのだが、その「パヴェル」とヴァニェックがただの友人であるだけに留まらず、最近の出版上演禁止処分の中で新作披露をするために作家としても組んだことに妬みと憤りと悔しさを隠しきれず、ついにはパヴェルとヴァニェック二人が自分

とは違う領分にいることを認める。ヴァニェックに対して終始 vykat で話しているスタニェックの複雑な内面、つまり基本的な権利のために体制に楯突いて不利益を被ることを避けてはいるが、そのようなパヴェルやヴァニェックたちの行動に価値を全く認めないわけではないということを窺わせる箇所である。文学を通してだけでなく行動を通して表現される彼らの政治的なメッセージが西側で賞賛され受容されることに対する渴望が隠しきれないのである。スタニェックの他人には見せたくない内面を表現するために、作者ハヴェルは共通の知人に対する意識や感情を用いる。チェコ語でこのように関係を表現することで、スタニェックが「プロパガンダに基づく制作をしなくては行けないかわりに報酬の良いテレビの仕事」をしているからといって、西側に対する名誉欲など精神的な価値を諦めているわけでは無い、むしろ西側に対しての名誉欲に関しては非常に強いことを、作者ハヴェルは暴露する。しかし、その名誉欲はあくまでも名誉欲で、創作欲ではないから、スタニェックは特定のイデオロギーを強制された状態で制作をこなせるのかもしれないのである。実際に映画製作などでは、特にプラハの春の失敗以降は親モスクワ的な映画を作成できない人々は映画製作の現場を去っていったという事実が指摘されている。そこでは芸術的価値の追求よりも、いかにプロパガンダに適しているかという目的が優先されていたのである。

3.2. 初演ドイツ語³における親称 (du/ihr) と敬称 (Sie)

スタニェックは呼称以外ではヴァニェックに対して姓ではなく名で呼ぶものの、敬称 Sie で話し、この Sie の「1 格 Sie」「2 格 Ihrer」「3 格 Ihnen」「4 格 Sie」の格変化形を用いる。『ドイツ語の構造』においてフォックスは、次のように述べる。

Sie とその関連形 (Ihnen, Ihr など) を用いる効能の一つは、話し手と聞き手の間にある種の距離を設定できることである。これに対して、du とその関連形 (dich, dir dein など) を用いれば親密さを含意することになる。(中略) また、特に相互的に使われない場合がそうだが (つまり会話の一方が du を使い、相手が Sie を用いるならば)、そうした形式の使用によって話し手と聞き手の社会的地位の相対的な差が含意されることがある。この非相互的な使用は、

会話の参加者の間に相当な年齢の差があるときにも現れる。この場合、Sie と du の使用は地位と「権^ツ方」の表現となる。一方、du の相互的な使用は、学生、仕事仲間など多くのグループにおいて見られるが、これはいわゆる「仲間意識」の表現であることが多い（フォックス 168-69）。

つまりスタニェックがヴァニェックに対して名で呼びつつ、敬称で話し続けるのは、相手と距離を置きつつ、権力関係として自分を上に位置づける効果があるのではないだろうか。対照的にヴァニェックの方は終始、スタニェックのことを姓で呼び、敬称で話すのだから、大きくはないけれど両者の間の微妙な非相互的關係を演出することに作者は成功していると言えよう。ここで意識したいのは劇冒頭、再会して間もなくの会話において、スタニェックはヴァニェックのことを「あなたは何も変わっていません（この多くの年月の中であなたが全く変えられなかったことをあなたは知っていますか）。Wissen Sie, daß Sie sich in all den Jahren gar nicht verändert haben?」と述べ、ヴァニェックが「あなたも変わっていません Sie auch nicht.」と返すと、スタニェックは、自分は年をとったと強調する箇所である（Havel, *Vaněk-Trilogie* 82）。互いの交友関係について話す内容を考えても、スタニェックから見たヴァニェックは青臭い若者のままで、似たような人間に囲まれて暮らしている。かつてはスタニェックもその仲間の一人であった。その頃に比べれば確かに何かを失ってしまった。しかし自分は損得を考えて行動できる分だけヴァニェックたちよりも「大人」になったのだ、というスタニェックの意識が、これから先の会話で徐々に伝わるように作られている。最初は露でないこのスタニェックの意識が、捕まったミュージシャンが自分の娘の腹の中にいる赤ん坊の父親で、水面下での釈放の努力が実らないがゆえに抗議文の作成をヴァニェックに依頼しようかと考えた経緯を話す時点から、はっきりと時に露骨なほどに表れるようになる。

そして原文チェコ語と同じく、パヴェル・コホウトに対してはパヴェルという名で、パヴェル・ランドフスキーに対してはランドフスキーという姓で呼んでいる。独訳においては基本的に原文チェコ語版と同じ特徴が見受けられる。

3.3. 英語（初の英訳、ブラックウェル Blackwell 訳）⁴における関係性の表れ

英語には、直接、関係の親疎を示すような表現は目につかない。お互いの名前の呼び方はチェコ語版、独語訳ともに同じである。原文にない表現が入っていたり、苦笑いかもしれないけれど、観客の笑いを誘おうとする作者の意図が込められている最後のト書きが訳されないで抜けていたりなど、作者の意図をそのまま伝えるより、訳者の意図が多少混じる。チェコ語版や独語訳を見ないまま英訳テキストを読むと、スタニェックの感覚がひたすら普通に感じられ、親疎を表現することで伝わっていたスタニェックの会話の居心地悪さが伝わりにくくなる。

4. člověk (lidé)及び národ に表れる「一人間の感覚」と「国家または民族意識」

作品中、原文チェコ語において強い印象を与えるのが、「人間 člověk（人々 lidé）」と「国民・民族 národ」の単語の使い方である。これらの単語をハヴェルは劇中の会話を通して効果的に使い、ヴァニェックの立ち位置を明らかにしていく。最初は劇の冒頭である。幕が開いて、緊張した沈黙の後、既に舞台に立っている二人の挨拶が交わされる。

スタニェック 「ヴァニェックよ！人間よー」

（ヴァニェックは困惑しながら微笑む。スタニェックは感情を抑えつつ「さあ、行こう」と促す。）

STANĚK Vaňku! Člověče-

(Vaněk se rozpačitě usměje. Staněk ho pustí a ovládne své vzrušení) (Havel, *Spisy*2 645)

一般に、公式の場や共産党の黨員間では同志 soudruh と呼びかけることが多い。十数年ぶりに再会したスタニェックがヴァニェックによびかける際に、同志 soudruh ではなく人間 člověk の呼格が使われている。「人間よ Člověče-」という呼びかけは唐突な印象を与えずにはいない。独語訳では「おやまあ、こいつめ Menschenskind!」とされているが、英訳では名前による呼びかけとともに「こんにちは Hello」とし

か書かれていない。ヴァニェックのモデルである作者ハヴェルはドブチェクの提唱した「人間の顔をした社会主義 *Socialismus s lidskou tváří*」を目指した「プラハの春 *Pražské jaro*」を正面から支持して上演禁処分を受けた。ここでスタニェックがヴァニェックを呼ぶにあたって *člověk*（人々 *lidé* の単数形）の呼格 *člověče* を用いるのは、少なくともヴァニェックのことを体制にそって暮らしているとは見なしていないことを示す。体制に順応し「正常化」された立場にあるスタニェックが「ヴァニェックよ！人間よー」と呼んでくることに対して真意を測りかねたかのように、ト書きには、ヴァニェックが困惑しながら微笑む、とある。さらに劇が進むにつれて、スタニェックがヴァニェックの歓心を買おうとしていることが見え隠れする中で、ヴァニェックの刑務所での生活についての言及するときの使用、

スタニェック 「私たちのような種類の人間に耐えられるのか？」
 STANĚK Může to *člověk* našeho druhu vůbec vydržet? (Havel, *Spisy*2 648)

という形で二人とも同じ種類の人間だという呼びかけがなされる。しかし、会話が国全体に及ぶと調子が変わる。

スタニェック 「いやな話さ、人間よ、いやな話だよ！この国はくず支配されている—国だって？これが数年前に、あんなにも素晴らしくふるまったのと全く同じ国だろうか？あの恐ろしくペコペコする背中！全部、エゴイズム、汚職まみれさ、恐ろしい！人間よ、彼らは私たちから何を創り出したというのだ？私たちは、全く未だそれなのか？」

STANĚK Je to hnus, *člověče*, hnus! *Národu* vládne spodina – a *národ*? Je to vůbec tentýž *národ*, který se ještě před několika lety choval tak báječně? To strašné hrbení páteří! Všude jen sobectví, korupce, strach! Co to z nás, *člověče*, udělali? Jsme to vůbec ještě my? (Havel, *Spisy*2 649)

数年前と言えば、プラハの春を引き合いに出して比較しているのだろうが、かつては誇り高く振舞った国民が今は酷い隷従状態にあると言うわけである。そして未だ自分たちは誇り高い国民なのかと問うわ

けである。ヴァニェックが、自分は、そのように悲観的には見ないと
言うと、ようやくフェルディナンドと名前を呼んでスタニェックは続
ける。

スタニェック 「怒らないでください、フェルディナンド。しか
しあなたは偶然、普通の環境には生きていません。あなたが
知る全ては、この腐敗全てに抵抗しようとする人々です。あ
なたがたは互いに希望を与え、励ましあい続けているだけで
す。しかし、私が生きてこなければならなかった環境をあなた
が知っていたら！喜びなさい。あなたはもはやそのような
こと全てとまったく関係がありません。そのような環境は人
に胃を悪くさせる—」

STANĚK Nezlobte se, Ferdinandě, ale nežijete v normálním prostředí
– stýkáte se jen s lidmi, kteří tomu všemu dokáží čelit – dodáváte
si vzájemně naději – kdybyste ale věděl, v čem musím žít já!

Buďte rád, že s tím vším už nemáte nic společného! Člověku se z
toho obrací žaludek- (Havel, *Spisy*2 649)

スタニェックは最初に、プラハの春(1968年)と比べて、この戯曲の
背景である憲章77直後のチェコスロヴァキアを批判するときには「人
間よ」と呼びかけ、ヴァニェックが現状をそこまで酷いとは思ってい
ないと述べると「フェルディナンド」と名で呼ぶ。スタニェックはか
なり大胆にヴァニェックの心情を慮った発言をして、ヴァニェックの
そこまでは考えていないという言葉をとってから、ようやく名で呼ぶ
のである。ヴァニェックをスタニェックの意図する結論へと誘導する
方法はこれ以降も似た方法をとる。極論まで話を進めておいて、ヴァ
ニェックにそこまではと反対させて、スタニェックの考える結論に導
いていこうとするのである。ソ連に支配された衛星国状態に対して、
どのような立ち位置をとっているかを探りつつ、時に上からの視線で
会話がなされるのである。

しかし、この後、ヴァニェックの刑務所での経験を尋ねながら、自
分もいずれは尋問されるだろうと告白する。この時点では未だ明かし
ていなくても、娘アンチェの妊娠相手であるヤブーレックを釈放させ
るために裏工作をして、それでも効果がなさそうなので抗議文を書く

ためにヴァニェックを呼んでいる状況にあつては、自分はもはや、ヴァニェックの側につくことを半ば覚悟しての会話である。普段は考えたくもない反体制作家であるヴァニェックたちの人権活動に対して最大限の賛辞を送ったあと、スタニェックは「おそらく[国家]の道德再生の望みはそこにかかっているのだ ale možná právě na ní visí naděje na mravní obrodu [národa]-」(Havel, *Spisy*2 651)と締めくくる。ヴァニェックは、スタニェックが誇張しているとして謙遜しつつも、「その希望は結局、全ての信頼できる[人々]の中にあります Ta naděje je přece ve všech slušných [lidech]」(Havel, *Spisy*2 651)と答えている。多くの人が亡命するような自国の隷属状態の中で、その「正常化」に沿った人間と、沿わないで且つ亡命もせずに留まった人間との間で交わされる会話である。しかしスタニェックがヴァニェックに頼み事があることをこの時点では隠して会話していることを考えれば、お互いが同じ人間であることの確認とともに、国家意識や民族の歴史の確認することで、たとえ困っている事態であっても現状を全否定して亡命の道をとるのではなく、改善を求めたことで反体制と言われても国内に留まりたいという意思がそこに表れているのである。そしてスタニェックは成ることなら、反体制運動にも手を染めたくはない。その板ばさみの中で、ヴァニェックが反体制運動によって支払った社会的損失に配慮しながら、自分の立場を訴える。自分のことを話しているにもかかわらず、自分の状態として言わず、人が、と言う。ここでは既に一個人と国家・民族との間の葛藤を表すだけでなく、主語を明言することを避けて一般化する効果として「人 člověk」が使われている。スタニェックが「私が」と言ってもよい箇所であるにもかかわらず、自分ひとりだけではないのだ、ということが言外に伝わる表現である。

スタニェック「あなたがしていることのために何と高価な代償を払わなくてはならなかったか、私は知っています。しかし[人]が公的な組織による見世物に未だ耐えられるほど幸運か、あるいは不運であるとは思わないでください。その同じ人間が同時に自分の良心と調和していきたいと望んでいるのです。それもまた簡単ではない」

STANĚK Vím, jak tvrdě platíte za to, co děláte. Ale nemyslete si,

člověk, který má to štěstí nebo tu smůlu, že je pořád ještě tolerován oficiálními strukturami, a který chce přitom zůstat v souladu se svým svědomím, to taky nemá lehké – (Havel, *Spisy*2 655)

同じ使われ方で、より明確な表現が、

スタニェック「ご存知の通り、私のような地位にある**人間**はあれやこれや理解することを学ばなくてはなりません、怒らないでください、確かに、全て限界というものがあるのです。」

STANĚK Víte, **člověk** v mé situace se naučí chápat leccos, ale přece jen, to se na mne nezlobte, všechno má své meze!– (Havel, *Spisy*2 659)

このように言うことで、自分は地位のある階層に属しているということ、一人ではなく仲間がいるということを示す。もはや、ここでの人間はヴァニェックと同じ人間であるという意味では使われていない。最初、スタニェックはヴァニェックの考えに沿って、国家に対して、お互いに個人である存在として、痛みや悩みを理解できる同じ人間という意味で「**člověk**」という言葉を使い始めるのだが、ヴァニェックの共感や理解を得られるにつれて、自分はヴァニェックとは違う種類の人間なのだという意味として「**člověk**」を使うようになる。スタニェックは、この国家に対する個人としての「**člověk**」と、ヴァニェックとは違う人間であるという「**člověk**」の間を結局、行ったり来たりするのである。そして国家に対する個人意識の共有として「**člověk**」が使われ、スタニェックとヴァニェックが同じ人間であるという地点に立ったときのみ、スタニェックは「**国**がこれら全てから、いつの日か回復できると思いますか? Myslíte, že se **národ** z toho všeho někdy ještě vzpamatuje? (Havel, *Spisy*2 654)」と言うように国の運命を案じるかのような発言をするのである。こうして、ヴァニェックとその仲間がソ連の支配下にある政府からは厄介者扱いされていても、実は、それゆえにこそヴァニェックたちが愛国者であることをスタニェック自身が理解していることをハヴェルは示しているのである。

5. 結びにかえて

ハヴェルにとって言論統制の最も厳しい時代に書かれた「Protest」は人称の様々な変化で親疎を表現することにより、かつては仲間だった二人の現在の複雑な関係を描き分けている。加えて登場人物が使う *člověk (lidé)* 及び *národ* という言葉によって個人の国家に対する意識や内面の揺れを書くことで、自国が他国による隷属状態にあるなかで国を愛することの真実をも描いていると言えるであろう。

※ 本稿は2011年1月7日に修士学位論文として提出したものの一部を抜粋し、大幅な加筆訂正を行ったものである。

注

- 1 「Protest」という題はチェコ語であり、独語、英語も同じである。ハヴェルは訛りが強いという指摘もあるが、英語を話す。2006年に封切られた映画「市民ハヴェル休暇中 *Citizen Václav Havel Goes on Vacation*」には、ピロード革命前に秘密警察 *Státní bezpečnost (StB)* によって自宅監視中、外国メディアに対しハヴェルが監視されている状況を英語で説明する様子が記録として残っている。
- 2 チェコスロヴァキアと運命をともにしながら独自の現象学を展開したパトチカ思想は、1980年代以降ヨーロッパの現象学者たちの再評価を受け、政治論を含む多くの著作がフランス語に翻訳され、独語の選集も出ている。
- 3 Václav, Havel. *Vaněk-Trilogie: Audienz-Vernissage-Protest und Versuchung, Sanierung: Theaterstücke*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch, 1989. 独訳は初演の翌年に著作権を取得したガブリエル・ラウブ Gabriel Laub による。
- 4 Goetz-Stankiewicz, Marketa. ed. *The Vaněk Plays: Four Authors, One Character*. Univ. of British Columbia Press, 1987. 英訳は1987年に出版された戯曲集に採録されたヴェラ・ブラックウェル Vera Blackwell による。著作権は1984年で「Protest」初の英訳。

主要参考文献

- 倉光雅己「ハヴェルの自伝的戯曲における言語的特徴」『創価大学別科紀要』18(2006): 19-49.
- Václav, Havel. *Spisy 2 HRY*. Praha: Torst, 1999.
- Kohout, Pavel. *Attest: Einakter*. Kassel: Bärenreiter Verlag, 1979.
- フォックス、アンソニー『ドイツ語の構造』福本義憲訳（三省堂、1993）。

Kriseová, Eda. *Václav Havel: Životopis*. Brno: Atlantis, 1991.

Suchánek, Jiří. *Kdyby se Václav Havel zbláznil*. Brno: Petrov, 1999.

Kaiser, Daniel. *Disident Václav Havel*. Praha: Paseka, 2009.

Tucker, Aviezer. *The philosophy and politics of Czech dissidence from Patočka to Havel*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, c2000.